

令和5年度 川西市社会教育委員の会
提言書

年間研究テーマ

「社会教育施設のあり方について
～郷土館の社会教育施設としての活用方法～」

川西市社会教育委員

目次

I 提言	1～4
1. 提言に至る経緯	1～2
2. 郷土館のあり方	3～4
3. 結び	4
II 資料	5～8
1. 今期社会教育委員の会 会議開催日及び主な内容	5
2. 討議の経緯	5～7
3. 川西市社会教育委員の会 委員名簿	8

I 提言

1. 提言に至る経緯～郷土館の現状と課題～

川西市郷土館は、かつて多田銀銅山の製錬で繁栄した東谷地区に位置し、銅の製錬を生業としていた旧平安家住宅を利用して、昭和63（1988）年11月に開館。平成2（1990）年11月には、市内の小戸地区にあった洋館の旧平賀家住宅が移築復元された。

平成7（1995）年11月には、川西市にゆかりのある日本画家の青木大乘・洋画家の平通武男画伯の記念館として、ミュージゼレスポアールがオープンされた。同時に旧平安家住宅では、日本の児童教育や手の工学研究家であり、晩年を川西市で過ごした一色八郎氏の遺族から寄贈された箸の展示室を鉱山資料展示室とともに公開。平成22（2010）年2月には、平通画伯のアトリエを再現したアトリエ平通もオープンされ、絵画教室などが行われている。

旧平安家住宅と旧平賀家住宅は、国登録有形文化財（建造物）に登録されており、加えて、旧平安家住宅は兵庫県景観形成重要建造物に指定、旧平賀家住宅はひょうご近代住宅100選に選出されている。

同館は、開館以来30年以上が経過し、一時的に入館者が減少した時期もあったが、通常の施設公開のほかに、学校教育や地域住民との連携、数多くの企画展示や講座を実施するなど、歴代館長が様々な取り組みや工夫をしてきたことで、現在、一定の来館者は望めている。

一方、立地的な問題があり、必ずしも来館しやすい場所にあるとはいえないことや、歴史資料としての郷土館とアートの施設としての郷土館という内容が異なる施設が混在しており、一貫性を持たせることが難しいことなどが課題として見受けられる。

文部科学省では、「第3期教育振興基本計画」を踏まえて、地域の「学びの場」である社会教育施設を拠点として、人々の暮らしの向上と社会の持続的発展のための学びを推進する取り組みを進めており、社会教育施設においては、地域の課題を適切に把握するとともに、地域住民のニーズに応じた運営を行うことが重要とされ、さらには、施設運営の質の向上を図ることとしている。

このような中で、令和5（2023）年に「第4期教育振興基本計画」が閣議決定され、「日本社会に根差したウェルビーイング^{※1}の向上」を目指すとされた。また、「地域コミュニティ基盤を支える社会教育の推進」が目標の一つとして示され、社会教育施設の機能を強化することなどにより、地域の教育力向上を図ることとされた。

こうした国の動きも踏まえ、より一層社会教育施設として活性化させたいという市の意向を受け、今期の川西市社会教育委員の会では「社会教育施設のあり方について～郷土館の社会教育施設としての活用方法～」をテーマに、今後の郷土館のあり方について研究することとした。

以下、本会で議論した内容、意見及び提言について述べる。

《注釈》

※1 ウェルビーイング

- 身体的・精神的・社会的に良い状態にあることをいい、短期的な幸福のみならず、生きがいや人生の意義などの将来にわたる持続的な幸福を含む概念。
- 多様な個人がそれぞれ幸せや生きがいを感じるとともに、個人を取り巻く場や地域、社会が幸せや豊かさを感じられる良い状態にあることも含む包括的な概念。

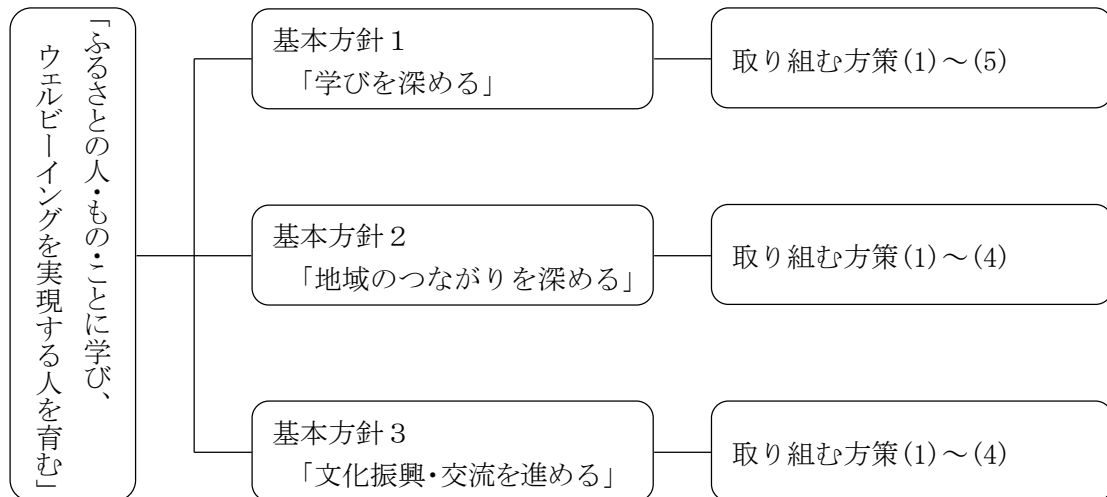
国の第4期教育振興基本計画 閣議決定 より

2. 郷土館のあり方

郷土館が社会教育施設としてより一層活性化するため、以下の方策を提言する。

郷土館は「ふるさとの人・もの・ことに学び、ウェルビーイングを実現する人を育む」ための施設として、「学びを深める」「地域とのつながりを深める」「文化振興・交流を進める」の3点を取り組みの大きな柱とした。各基本方針に沿って取り組む方策は以下の通り。

《イメージ図》



【ふるさとの人・もの・ことに学び、ウェルビーイングを実現する人を育む】

●基本方針1 「学びを深める」

◆〈取り組む方策〉

- (1)郷土館の持つ教育コンテンツで出前授業を実施し、学校園所の子どもたちにふるさと川西を伝える。
- (2)郷土館にある農具などの所蔵物を積んで学校施設を巡回し、川西の歴史を伝える。
- (3)郷土館の来館者用の学習プログラムを作成する。
- (4)ホームページに学習で使える資料の掲載を充実させる。
- (5)最新技術のVRなどを使って、今と昔の日常や産業の仕組みなどを紹介する。

●基本方針2 「地域とのつながりを深める」

◆〈取り組む方策〉

- (1)郷土館に関する看板や誘導板を設置する。
- (2)出前授業の実施にかかるボランティアや職員など、子どもたちの学習をサポートするスタッフを育成する。
- (3)川西市内の歴史や観光などに関するお散歩マップを作成し、郷土館に設置する。
- (4)複合施設としての愛称を付ける。

●基本方針3「文化振興・交流を進める」

◆〈取り組む方策〉

- (1) 絵画展など表彰式を郷土館で実施する。
- (2) 川西の文化や文化財がわかる全図などを作成し、郷土館に設置する。
- (3) 県内外の類似施設との連携を進める。
- (4) PRするためのボランティアグループなどを立ち上げる。

3. 結び

今回の提言では、川西市郷土館をさらに活性化させるために、国が提唱しているウェルビーイングに着目し議論を進めてきた。教育にウェルビーイングが求められるのは、子どもたちの抱える困難が多様化・複雑化していることが背景にあるとされ、現在の日本の教育施策は、個人も社会も幸福で充実した人生を送るために必要な心理的、認知的、社会的、身体的な働きと潜在能力を実現することであり、「子どもたち一人ひとりと社会全体が現在から将来にわたって幸せで満ち足りた状態となるため」に教育を行うことが基本的な考えになっているからである。

川西市郷土館は、いずれもたいへん貴重な施設で価値も高く、個人も社会も幸福で充実した人生を送るために必要な社会教育施設であり、現在、川西市の財産として長く活用するために旧平安家住宅の耐震補強改修等工事を進めており、令和6（2024）年10月に再公開の予定である。これは、まさしく日本社会に根差したウェルビーイングの向上を目指していく施設である。

また、川西市では、令和6（2024）年2月に教育大綱を策定し、生涯学習において市民が川西に愛着を持てるように貴重な文化財や自然遺産を活かした環境教育を実施するとともに、永きにわたって受け継がれるように保護・顕彰を進め、地域の歴史や文化に親しむ機会を創出するとしている。

人生100年時代といわれる中であって、生涯学習の重要性はより一層高まっており、川西市郷土館が社会教育施設としてさらに活性化され、学びの場としてのみならず、地域とのつながりの場、文化振興・交流の場として発展し、永きにわたり、多くの人に親しまれる、またウェルビーイングを高められる施設となることを期待する。

Ⅱ 資料

1. 今期社会教育委員の会 会議開催日及び主な内容

開催日	主な内容
令和4年6月23日(木)	今期の研究テーマについて 「社会教育施設のあり方について～郷土館の社会教育施設としての活用方法について～」
令和4年8月18日(木)	川西市郷土館現地視察
令和4年12月21日(水)	川西市郷土館のあり方について 川西市郷土館を現地視察したことを踏まえて
令和5年3月15日(水)	川西市郷土館のあり方について ～他市の良い取り組み事例について～
令和5年6月22日(木)	川西市郷土館のあり方について 令和4年度の会議で出された意見について 川西市郷土館のあり方についての提言について
令和5年10月6日(金)	川西市郷土館のあり方について 川西市郷土館のあり方についての提言(案)について
令和6年2月8日(木)	川西市郷土館のあり方について 川西市郷土館のあり方についての提言(案)について

2. 討議の経緯

郷土館が社会教育施設としてより一層活性化するためにはどうすればよいか、現地視察や他市事例紹介も交えた中で討議を行った。

委員からの意見は以下のとおりであるが、大きな方向性として、「三つの価値(場所、建築物、歴史)を再認識する機会にする」「ふるさと意識を醸成する場にする」「憩いの場にする」が挙げられ、それに伴う郷土館の活用方針として、「社会教育施設として、学校教育、生涯学習、地域住民との結びつきをベースにした活用方法を検討する」「現在、施設内で利用していない時間や場所について、更なる活用ができないかを検討する」「郷土館内の施設ごとの活用のみではなく、郷土館全体での活用方法を検討する」「SNSの活用など新しい情報発信方法について検討する」などの意見が挙げられた。

委員からの意見

<p>基本方針1「学びを深める」</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・総合的な学習の中で、子どもにとってニーズのある場所としてとらえた上で、学習の対象として扱うことも一つの考え方である。 ・価値がある、素晴らしい施設だと感じた。館長はじめとして努力されており、展示など好感が持てた。学校教育との連携を考えていると思うが、テーマが難しく、子どもたちが行ってわかるようになっていない。学芸員など説明ができる人やそういった人材の育成が必要ではないか。 ・郷土館で展示している農器具などを持って、出前講座として学校などを回れば、興味を持ってもらえるのではないか。 ・出前講座は学芸員でなければならないということはない。それに類するボランティアや非常勤職員を育てて専門的な話をしてもらうのが鍵になる。 ・川西市の色々な文化を郷土館に行けば学べるといった考え方も一つあると思う。郷土館に行けば、川西市の全図があり、文化財として指定しているものが概略で示されており、それ以上の詳しいことは、自分で現地へ行って、自分の目で見てみる。そういった流れを郷土館の敷地の中で応用できないか。 ・郷土館へ子どもを連れて来て、川西市は地形的にはこうで、ここへ行ったら里山があつていろいろな生物がいる。南部の方では、昔は摂津の国で伊丹城があつて、その砦で川西市が守られていて、川があり舟運があつたといったことなど、総合的に見られるような工夫ができないか。 ・郷土館は生涯学習ということで、あらゆる世代の知的関心を高めるというミッションはあると思うが、これから民間を入れてリノベーションをするという方向ではないということを前に説明いただいた。そうなると大幅な入館者増は今後も期待できないと思う。そうであれば、生涯学習施設として生き残っていくには、あらゆる世代の生涯学習を担うということに加えて、これから子どもたちに対して、学校教育では体験できないような学びを提供する場として、頑張っていくという方向性が良いのではないかと思う。単なる入館者数だけでは語れない価値というものを大事にしていく方向性だと思う。これを実現しようと思うと、やはり今の郷土館のスタッフだけでは、不十分ではないかと思う。子どもたちの学習をサポートできるようなスタッフ、人材育成ということが重要な課題ではないかと思う。 ・加茂遺跡もあれば勝福寺古墳もある。川西市は地形的に南北に広いから転々としにくいので、郷土館で一括して学ぶことができれば良いと思う。ただし、物を置いているだけでは学びにならなくて、ナビゲーターやコーディネーターなど、つないでくれる人、教材化してくれる人がいた方がよいと思う。 ・小学校の授業の受け入れをする場合、里山体験学習でいうと、市内の里山が天然記念物になっている、川西市の中でもすごく重要な自然だということをきちんと見せて、それについての解説をきちんとやると、こんなに凄いものが川西市にあるんだと子どもたちに伝わる。それは郷土学習として絶対やったほうが良いと思う。一方で、おとな、特に高齢者は割と通の人が来る。マニアックな歴史とか建物の構造とか、そういったものに比較的関心の高い人が来ると思うので、その人たちが満足するようなプログラムを考える必要がある。ターゲット毎に検討するのが適切ではないかと思う。 ・最近ではVRなどを用いて、子どもに授業をすることもできるので、郷土館見学後にVRを見せることができたなら、その当時のこと、現代社会の成り立ちとか、産業の仕組みをつなげて学べるとか、かつての暮らしと今の日常を振り返って、現実の今の生活と結びつけて何か学べるとか、そういう人も出てくるのでは。 ・ゲストティーチャーとして学校に出向き、興味付けをして、次のステップとしてオリエンテーリングの中で郷土館を入れるような仕組みはできないか。
<p>基本方針2「地域のつながりを深める」</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・子どものアイデアを取り入れた展示をすることで、まちづくりの拠点としての良い活動になるのではないか。 ・東谷地区の歴史や特徴などの学習コンテンツを準備する。その中に郷土館があることで興味を持つ人が増えるのでは。 ・トライやる・ウィークを経験した中学生、近隣の高校生、郷土史や美術に興味がある生徒など、切り口を明確にして、郷土館を使って、対市民、対親子、対住民などにそのようなプログラムを提供してもらう。もしくは、市と連携協定を結んでいる大学へ依頼し、郷土に関係している学生にプログラムを提供してもらう。学びの場を提供、コーディネーションをしていくことによって、新しい利用者が取り込めるのではないか。 ・お散歩マップなど、地域にある歩いて行ける場所を示すものを作った方がよいのではないか。魅力的な誘因物を作れば、60歳以上の人をターゲットに、今から準備をし、1～2年の間に足の向く先に郷土館があるという形を作っていけばいいと思う。 ・個性の強い三つの館(旧平安家住宅・旧平賀家住宅・ミュージアムホール)を言い表すような名称ないし愛称を募集するのも面白いのでは。 ・南部の学校が郷土館に出かけて行くには遠いので、例えば所蔵物を積んで学校施設を巡回するか、出前授業で鉱石を持ってきて、その流れで郷土館を案内するなどがあれば、興味がわくのではないか。 ・ウォーキングでどうしても必要なものが地図である。街中散歩というものがあつて、目的地までどこにトイレがあつて使えるなど、わりと便利で重宝する。それに文化財が含まれていて、立ち寄り先が1～2箇所あれば、時間を有効に使いながら、足腰も鍛えられるので、特に高齢者は興味を示される。その中に、郷土館が入っていれば利用者も増えると思う。 ・東谷地区の歴史としてのストーリーを作り、芝居小屋など精練で栄えた当時の娯楽施設などを整備する。

<p>基本方針3「文化振興、交流を進める」</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・市主催の作品展などの表彰式を郷土館でやる。郷土館を基軸とするのを考えてはどうか。 ・人が集まらないうと、次のステップへいかない。市役所以外のところでチラシなどをどう置いてもらえるか、協定を結んでいる大学などをもっと活用すればどうか。 ・川西市の郷土館が他より行事的に劣っているとは思わない。通常の広報的な力も発揮されている。その上で、尚且つ活性化するには、単に維持管理だけではダメで、土地柄や地域的な色々なことが影響するため、長期的に考える必要がある。短期的なものでは看板や誘導板があるが、予算さえつければ短期的なものは問題があれば修正したら良いと思う。 ・施設のリニューアルなどは難しいと思うので、芸術・建築という分野で、そこに行けばふれられる、インスピレーションを感じられる場であれば良いと思う。 ・PRとして、フィルム・コミッションなどを利用するのがよいのではないか。 ・「文化交流を深める」や「地域のつながりを深める」という、つながりをコンセプトとして打ち出していくのも必要だと思う。それを打ち出すと、子どもが来て学ぶ、いろいろな人が学ぶだけではなく、お互いがどうやって、そこで学んでつながりあって、ネットワークを作っていくのかという視点ができてくる。 ・ホームページを見ると体験学習で作った作品を飾られたりしているが、そこにプラスして、そういう人たちがみんなでつながって、次にこんな活動をしたい、それぞれ持ち帰ってこんなことをしてみたいとか、交流の拠点になっていくと凄く開けてくると思う。そういうコンセプトに基づいて、さらに人々が交流を深めていけるようなプログラムをたくさん発信するのもいいと思う。 ・子どもたちに学ばせる、学ぶということは、一つは認識が広がる、その人の世界づくりにとって非常に大切。もう一つは、人との関わり、交流からの仲間づくり、もう一つが、ウェルビーイングというものにつながると思う。 ・まず個人が学び、個々人の学びをつなげていく。学ぶところが学校である意味は、個人の学びを大事にしながらも、人と人とのつながりを同時に学ばせるというところにある。郷土館においても両面を尊重し合う、活かしていけるようなコンセプトがあれば良いなと感じた。
<p>その他</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・立地的な問題はあるが、すごく魅力の有る施設であり、我がまちにある財産として、子ども達にどう活用させていくか、今後考えていかなければならない。 ・300円の入館料を取るだけの価値は十分ある。ただ、川西市に住んでいる人が、郷土館がどんな施設か、中身を分かっている人が多いのでは。 ・バリアフリーになっていない。今の時代、利用して欲しいのであれば、それをまずやらないといけない。 ・歴史資料としての郷土館、アートの施設としての郷土館という内容の異なる施設が混在している。そうすると郷土館というものがピンと来ない。 ・こんなものがあるとか、価値がある建物ですよというだけでは、持続的に人は繰り返し来ないのでないかと感じる。福岡市博物館に金印が置いてあり、2センチ角のものだが、それだけを見るために行く。川西の施設もこれがあるから行くという、何かを用意できれば良いと思う。それが、高校生、大学生が提供してくれるプログラムだったらいいんだろうと思うが、川西の親子などは何を求めているのか。何があれば郷土館に足を運んで学ぼうと思うのか。提供する立場から考えるのではなく、保護者たちが何を知りたいと思うのか、学校の人たちがそこで何を学んでほしいと思っているのかを知る必要があると感じた。 ・多面的な施設なので、そういった意味で捉えどころがないという反面、いろいろなところに打っていけるという強みも持っている。 ・機能強化には大きく分けて人と物があり、ボランティアの育成が人、いろいろなコンテンツを考えるのが物。さらに館内と館外で分けたら、大きく四つに区分される。 ・機能強化以外に大切なのは広報だと思う。PRをどう行うかが重要。 ・基本的に利活用促進ということなので、どのように利用者を増やすのか。もしくは活用する人を増やすためにはどうするかということ。 ・例えば、一つ目が「ふるさと愛を育む施設」、二つ目が「文化交流を進める施設」、三つ目が「学びを深める施設」、心と情報と学習という、これが機能強化の内訳になるのでは。 ・郷土館が主体的に何かを興して、そこに何かがあるから、自発的に行くようになる、そういうことも考えないといけない。 ・緑美しい見所多い郷土館だが、見るという視点だけではなく、人と人がつながり合うという視点、VUCA(目まぐるしく変転する予測困難な状況)の時代、ウェルビーイングを高める時代が大事になってくる。 ・総合科学技術イノベーション会議では、学びのさらに上に多様な幸せ、ウェルビーイングを置いている。個人と社会のウェルビーイングを高めるということから一番上に掲げられるようになっている。教育施策の中核的価値として位置づけられるので、郷土館も大きな概念ではあるが、ウェルビーイングを目指すところまで掲げてみてはどうか。 ・旧平賀邸やミュージアム・スペースは、アートの要素が強い所。今は人があまり来なくて、認知度も低いかもしれないが、芸術施設があるというのは、利点だと思う。

3. 川西市社会教育委員の会 委員名簿

委員構成	氏名	選出区分	就任年月日
議長	野崎 洋司	学識経験者	平成 30 年 4 月 1 日 (再任)
副議長	常行 貞臣	学識経験者	令和 2 年 6 月 1 日 (再任)
委員	金子 愛	家庭教育関係者	令和 2 年 6 月 1 日 (再任)
委員	柏木 智子	学識経験者	令和 2 年 6 月 1 日 (再任)
委員	上田 萌子	学識経験者	令和 2 年 6 月 1 日 (再任)
委員	倉橋 滋樹	社会教育関係者	令和 2 年 6 月 1 日 (再任)
委員	田中 薫	学校関係者	令和 4 年 4 月 1 日 (新規) ～令和 5 年 3 月 31 日
委員	大西 ゆかり	学校関係者	令和 4 年 4 月 1 日 (新規)
委員	羽瀬 克彦	学校関係者	令和 5 年 4 月 1 日 (新規)